

母と言葉

——アルベール・カミュの初期作品世界——

鈴木忠士

はじめに

第1章 アルジェリアの母と息子

第2章 『苦悩』との出会い——〈読む〉から〈書く〉へ

第3章 『裏と表』論

I テキストの生成過程……（この節のみ第19巻第4号）

II 深層のテキスト

A 母のイメージと息子の母親に対する関係

……（この項の途中まで本号）

B 祖母のイメージ

C 父のイメージ

III 『魂のなかの死』と『生きることへの愛』

第4章 『幸福な死』論

第3章 『裏と表』論〔続〕

II 深層のテキスト

A 母のイメージと息子の母親に対する関係

『裏と表』のなかで、「母親と息子」の関係が扱われていることが誰の目にも明らかに見てとれるのは、『皮肉』の第3話における一情景と、『肯定と否定との間』における五つの情景である。

まず、六つの情景を描くそれぞれのテキストの骨子を、『裏と表』に現わ

れてくる順序に従って、以下に紹介する。

「娘〔母親〕は身体の利かぬところがあり、頭がなかなか働かなかった。〔……〕老婆〔祖母〕は客があるのを心待ちにしていたが、それは彼〔孫/息子〕をきつい目で見据えながら、こう尋ねるためだった。《お前はどっちがお好きだえ、お母さんとおばあさんと、さ。》この戯れ〔茶番劇〕は、当の娘がその場に居合わせたときには、事が面倒になった。というのも、どっちにしても必ず、子供は《おばあさん》と答えるのだったから。そのとき、彼の心のなかには、母親への愛が激しく衝き上げているのだったが。母親とはいえば、ずっと口をつぐんだきりだった。か、あるいは、客がこうしたえり好みに驚く場合には、《あのひとが〔彼を〕育ててきたものでね》と言うのだった。」(50-51)〔テキスト-1〕

「その子供の母親も、静かに黙したままだった。時に、聞かれることがあった、《何を考えているの?》と。《何も》と彼女は答えるのだった。そして、そのとおりだった。すべてが現に目の前にある、だから何も無いのだ。彼女の人生も、彼女の利害関心も、彼女の子供たちも、感じられるにはあまりに自然な仕方です、現に目の前にある、というだけのことなのだ。」(63-64)〔テキスト-2〕

「彼女〔母親〕は身体の利かぬところがあり、頭がなかなか働かなかった。〔……〕ずっと前からもう彼女には哀しみはない。彼女は夫のことを忘れてしまったが、まだ子供たちの父親のことは話をする。子供たちを育てるために、彼女は働き、そして稼ぎを自分の母親に渡す。この母親は子供たちの教育を鞭です。あまりひどくぶつと、娘が言う、《頭はぶたないで。》というのも、自分の子供たちだからで、彼女は彼らが大層愛しているのだ。彼女は彼らを常に変らぬ愛で愛しているのだが、この愛は彼ら

にはこれまで決して頭にそれとして示されたことはない。」(64-65)〔テキスト-3〕

「時々、[……]身をすりへらす仕事から戻ってくると(彼女は家政婦をしている)、家には誰もいない。老婆は用足しに出かけ、子供はまだ学校だ。そこで、彼女は椅子にへたり込む。そして、空けた眼で、寄せ木張りの床の溝を我を忘れて憑かれたように追っている。彼女のまわりでは、宵闇が深くなり、そのなかで、こうした頑^{ムツ}なな沈黙^{テイスイスム}は救いようのない悲嘆に染まってくる〔遺棄の様相を呈する〕。子供がもしこのときに入ってくると、骨張った肩のやせ細った影法師がくっきりと見えて、彼は立ち止まる。恐いのだ。彼はたくさんのことを感じ始めている。自分自身の存在にもやっと気づいたところなのだ。だが、この動物的な沈黙を前にして、なかなか泣くことができない。彼は自分の母親を憐れんでいる。が、それが彼女を愛するということだろうか。彼女はこれまで一度も彼を愛撫したことはない。それは、愛撫する術も知るまいからなのだ。そこで彼は、長い間、ただ彼女を見詰め続ける。自分を他^{エトランジユ}人と感ずると、自分の苦しみを意識する。彼女には彼の立てる物音が聞こえない〔彼女には彼の言うことが分らない/彼女は彼の言うことに耳を傾けない〕。耳が聞こえないからだ。もうすぐ老婆が帰ってくる。そして生活がまた始まる。石油ランプの丸い輪、防水の食卓掛け、叫び声、野卑な言葉。だが今、この沈黙はひとつの時の絶え間を、無量の瞬間^{テムスユレ}を表わしている。そうしたことを漠然と感じると、激し易いたちの子供は、母親への愛がどっと溢れ出すのが感じられるように思うのだ。そして、ぜひともそうあらねばならない。なぜなら、結局、自分の母親だからだ。

彼女は何も考えていない。外は、光と、ざわめき。ここは、夜のなかの沈黙。子供は大きくなり、学ぶだろう。彼は育てられ、感謝を要求されることだろう、まるで苦しみを免れさせてくれているかのように。彼の母親

は相も変わらずこうした沈黙を守り続けてゆくことだろう。彼の方は苦しみながら成長してゆくのだ。一人前の男になること、大事なものは、それだ。彼の祖母が死ぬだろう。次いで彼の母が、そして彼が。

母親が跳び上がった。怖かったのだ。そんな彼女を見て、彼は痴呆のような様子をしている。宿題をおし、と言われる。子供は宿題を済ませた。今日、その彼は汚いカフェにいる。彼は、今や、一人前の男だ。それこそが、大事なことであったのではないか？ そうではない、とぜひとも思わねばならない。なぜって、宿題をし一人前の男になることを受け容れることは、ただ老人になる道に通じているだけだからだ。」(65-67) [テキスト-4]

「あの奇妙な母親の〔示す〕無関心！ その大いさに見合うものと僕に見えるのは、世界のこの量り知れない静寂^{ソリチュード}寂しい。ある晩、彼女の息子は——もう大きくなっていたが——彼女のもとに呼ばれてやって来た。極度の恐怖から、彼女は重度の脳震盪を起したのだ。彼女は、一日の終わりには窓の手摺に倚りかかる習慣だった。彼女は椅子に坐り、手摺の冷たく塩辛い鉄柵に口を当てる。彼女はそうして道行く人々を眺めている。彼女の背後では、夜の帳が少しずつその厚みを増してゆく。彼女の前方では、商店が突然灯りに照し出される。通りが人出と灯りでふくれ上がる。彼女はそのまま我を忘れて何とはなく眺め入っているのだった。問題のその晩、ひとりの男が彼女の背後に突然姿を現わし、彼女を引きずり込んで乱暴を働き、物音を聞いて逃げ去ったのだ。彼女は何も見なかった。そして気を失ってしまった。息子が着いたとき、彼女は寝ていた。彼は医者意見に従って、その夜を彼女の傍で過すことに決めた。彼は同じベッドの上で彼女と身体を並べて、夜具の上にじかに横たわった。夏だった。先ほどの事件の恐怖が暑苦しい部屋のなかにまだ残っていた。足音が伝わってき、扉がきしむ音がした。重くよどんだ空気のなかには、病人の気付けに使った

酔の匂いが漂っていた。彼女は、彼の横で、もがき、うめき、時として不意に跳び起きた。〔……〕彼らがこの夜どれほど孤立ネーブルしていたか悟ったのはずっと後のことでしかない。すべての人々を向こうに回して孤立していた。ふたり一緒に熱っぽい空気を吸っていたとき、《他人ども》は眠っていたのだ。この古い家のなかで、このとき、すべてが虚ろに思われた。深夜の電車が、遠ざかりながら、人間たちに源をもつ我々の希望というもののすべてを、町のざわめきが我々にあたえる確信のすべてを浚きらっていったのだ。家はまだ通りすぎていった電車の響きを伝えていた。が、それも次第にすべて消えていった。ときおり病人の怯えた唸り声が生ずる大なる沈黙の園しか、もはや残ってはいなかった。彼は、いまだかつてこれほどの疎外感デベイゼを覚えたことはなかった。世界は崩壊してしまっていた。それと一緒に、生活ラ・ヴィール・ル・モンス・トゥー・レ・ジュールが毎日繰り返される〔人生が毎日新たに甦よみがえる〕という幻想も。もう何も存在してはいなかった、勉強とか野心とか、食堂での好みとか好きな色とかも。自分が陥っていると彼には感じられる、病と死のほかは何も……ところが、世界が崩れ落ちてゆくそのときにすら、彼は生きていたのだ。そして、ついには眠り込んでしまいさえたのだ。それでも、ふたり一緒にの孤独という絶望的で優に優しいイメージをやはりたずさえてゆきはしたのだ。ずっと、ずっと後になって、彼はこの汗と酔の混じり合ったこの匂いを、彼が自分の母に彼を結びつけている絆を感じとったこのときのことを思い出すことになる。あたかもこの匂いが彼の心への測り知れぬ憐愍であるかのように。この匂いは、彼の身のまわりに展ひろがり、姿形をとって、まやかしになることなど意に介せず、感動的な定めをもつ貧しい老女の役割を演じるのだった。〕(67-70)〔テキスト-5〕

「今このときは、肯定と否定との合間のようなものなのだから、生きることへの希望にしろ、生きることへの嫌悪にしろ、それはほかのときに回そう。そうだ、ただ失われた楽園の透明さと単純さだけを採り集めるのだ、

ひとつのイメージのなかに。そこで、例えばこうだ。そう昔のことではないが、ある古い街のとある一軒の家に、ひとりの息子が母親に会いに行ったのだ。彼らは向かい合って坐っている。と、彼らの眼差しが会おう。

《ところでと、ママ。

——ところで、なんだい。

——退屈してない？ 僕って、おしゃべりじゃない？

——おお、いつだってお前がおしゃべりだったことなんかないよ。》

そして、唇の動かない美しい微笑が彼女の顔の上に広がって消えてゆく。そのとおりで。彼が彼女に話しかけたことは一度もなかった。それに、まったく、なんの必要があろう？ 黙っていても、事態は明らかになるのだ。彼は彼女の息子で、彼女は彼の母親だ。彼女は彼にこう言えばよいのだ、《ね、お前。》

彼女はソファベッドの裾すそに腰かけている。両脚をそろえ、両手をひざの上に組み合わせて。彼は、椅子にかけて、彼女の方をほとんど見ず、のべつに煙草を吸っている。沈黙。

《そんなに喫くまない方がいいのに。

——ほんとだ。》

[……]

彼女は灯りをつけるために立ち上がった。

《今ごろは夜になるのが早いね。》

そのとおりで。[……]

《近いうちにまた来るかい？

——だって、まだ出かけてもいないのに。

どうしてそんなこと言うの？

——そうじゃないの、何か言いたかっただけなのさ。》

[……]

《結局、その方がいいんだよ、と彼女が言う。

《生きて還^{かえ}ってきても、目が見えないか気が違っていたらうからね。そんなときは、かわいそうに、あのひと……

——ほんとか。》

そして、彼をこの部屋に引き留めているものは、いずれにしてもその方がいいのだという確信、世界の理に^{かな}適わぬ単純さのすべてがこの部屋のなかに隠れ潜んでしまっているのだという感じ、そうしたものでないとしたら、一体なんだろうか。

《また来るかい?》と彼女は言った。

《お前に仕事があるのはよく分ってるさ。ただ、時々はさ……》(73-76) [テキスト-6]

さて、以上六つの情景のそれぞれに登場する「母親」と「息子」の関係は、既に述べたような理由から、同一の原型的な関係の様々な局面における現われと見なすことができる。(1)から(4)まででは、「息子」はまだ「母親」の手もとにいるが、(5)と(6)ではもう独立しているか、あるいは少なくとも、母親から離れて別の生活を営んでいることが分る。したがって、上に挙げたテキストは、大体「息子」の成長過程に即して配列してあると考えてよいわけだ。そこで、六つのテキストを、順を追って吟味し、テキスト間の異同をただし、必要な場合には、同一の情景を描いている先行の草稿や異稿に当たり、テキストの深層を形成しているものを明るみに出して、ひとりの「息子」の「母親に対する関係」の移り行きをたどってみよう。

テキスト-1

一見したところ、ここに語られている挿話は、祖母である「老婆」が「愛を要求しうるものと思込んでいた」ことと、彼女の「役^{コメディエンヌ}者〔くせ者〕」(51) 振りを証示するためにあるのだ、と解すれば事足りるように思われる。なぜなら、「孫」が「母親への愛」を偽ってした「老婆」へのおもねりは、

後に振り返って見ると、「それにはまだ頬が赤らむ」ほどの恥かしい体験として蘇ってくるとしても、過去の漠然としたある時点での「思い出」として呈示されれば、当時は「孫」も文字どおりほんの「子供」(51)であったことが印象付けられえ、一切の責めは「老婆」に帰せられる、と見えるからである。だが、この挿話には、もっと「面倒」な事態が潜んでいるのである。

「子供」はなぜ、いつも「《おばあさん》と答え」たのだろうか。一家全員を「支配していた」(50)祖母への恐怖からだ、とひとまずは答えられよう。祖母は「あまりにも彼〔孫〕を虐げてきた」(53)と、「子供たちの教育を鞭でする」と言われているからである。そして、「孫」はまだ反抗する術を知らないくらい幼かったのだ、と。確かに、テキストにはそのような解釈を促す方向付けがある。しかし、もしそれだけのことであるならば、果して「それにはまだ頬が赤らむ」というようなことがあるだろうか。それに、「孫」の祖母に対する恐怖は、どこにも明言されていない。

語り手が、「そして、確かに、この女にも長所がなくはなかった」(51)と、「彼女の孫は、今ではそれが強く感得されていたのだが、事態を何ひとつ理解してはいなかったのだ」(53)と述べるとき、この『皮肉』の第3話のテキスト全体がもつ強力な方向付け、すなわち、あれかこれかの「絶対的な判断」(51)によって祖母を悪者に仕立て上げようとする方向付けに対し、ブレーキをかけようとしているのだと見ることができる。

だから、問われなければならないのは、なぜ「子供」の「絶対的判断」によって、祖母は実際の「事態」以上に悪者視されなければならなかったのかということである。直ちに思いつくのは、「孫」の「心のなか」には祖母に対する根深い敵意があったのだ、ということである。第一に、祖母は「子供たちの教育を鞭で」していたのだ。第二に、祖母はその「過敏な動物の自己愛」(64)から毎度「愛」の証を「要求」し、「お母さん」と答えたくても答えられない二重拘束下に「孫」を置いて残酷な「戯れ」に興じてきた。第三に、祖母は「孫」の母親である「頭の弱い娘を長い間支配していた」(64)

し、「客」と当の母親の目の前で息子の「愛」を横取りし続けてきたのである。

それはそうに違いない。ただ、祖母とだけのときに「おばあさん」と答えたのは、幼い身には無理からぬことであると言え、顧みて抱く恥辱の念も、傷つけられた「自己愛」からくるだけのものであるだろうが、母親が「居合わせたときに」も、やはり一度として「お母さん」と言えなかったこと、そのことこそが癒^{いや}し難い恥かしさで後年の「子供」の心をさいなむのではないか。それに、「お母さん」と言えなかった理由が、祖母に対する恐怖にすぎなかったとしたなら、祖母の「居合わ」さないときには「母親への愛」を証することができたはずだ。そして「戯れ」は、弱い立場にある母と子の默契によって、「支配」者である祖母の下手な「役者」振りを笑う「茶番劇」に転ずることもできたはずである。

「子供」が一度として「お母さん」と答えなかったのは、気弱な子であったからでも、反抗心に欠けていたからでもあるまい。また、自分の嘘に鈍感であったからでもあるまい。「一介の役者〔食わせ者〕にすぎなかった」(51)という「絶対的判断」は、反抗心なしにはかなうまいから。「そこに相手の芝居しか頑に見ようとしなかった」態度や、それがまた「明晰さと、愛することの拒絶のなかに」ある「絶望的な勇氣」(53)と見なされていることについても同じことが言える。そして、祖母の葬式で「泣いた」ときには、「真心がこもっていないのでは、死者の前で嘘をついているのではないか」という危惧の念」(54)に脅かされたほどなのだ。

そうしてみると、一度も「お母さん」と言わなかったのは、「お母さん」という言葉、つまり「母親への愛」の表現がそれとして受けとめられ、それに見合う応えが返ってくることは決してないのだ、という「明晰」な断念の故なのではあるまいか。祖母の「戯れ」に先立って、母はとうから息子の呼び掛けに「^{トゥー-ジュニール}ずっと口をつぐんだきりだった」のであり、そしてこの「戯れ」においても「^{トゥー-ジュニール}相変らず」そうなのだと、息子は己れの断念の正しさを独り確

かめ続けていたのではないか。

もしそうなら、まず母親そのひとに対する「愛することの拒絶」が、息子の「愛」に応えることのなかった母への恨みが、どうして「心のなか」にわだかまらなことがあろう。そして、このような母親に対する原初的な敵意の潜在を「子供」の心中に想定したとき、祖母が悪者視される理由がよく分ってくるのである。祖母には、〈悪い母〉が投影されていたのである。息子の母に向けられた敵意が投影されているからこそ、祖母は「長所」を捨象され、専ら「鞭」を手に「子供」を「虐げ」る者として立ち現われてくるのである。

だとすると、「孫」の「おばあさん」という答は、見掛けほど無邪気な祖母の御機嫌とりではない。敢て「客」の前で繰り返されるその答は、母を試し、母に復讐する言葉でもあったのではないか。だが、試された母は、「ずっと口をつぐんだきりだった。」母親は息子の「えり好み」に、そしてそれを人前で広言して彼女を笑い者に行っている息子を前にして、ひたすら口惜しさと怒りをこらえていたのだろうか。もしそうなら、息子はむしろ救われる。たまさかの母の言葉は、息子の期待をまったく裏切るものであった。「あの人が育ててきたものでね。」それは自ら母の座を明け渡した者の言葉だ。育ての母こそが「母親への愛」に値する、そしてそれは当然のことなのだ、というわけだ。「客」の「驚」きはむしろこうした意表をつく返事に対してこそ示されたはずである。「子供」の「驚」きは推して知るべしである。確かに、考え方によっては、母親のこの言葉は、なかなか巧妙なものである。それは、「客」の疑念を払うとともに、身内三人の体面を保たせる。「子供」の奇妙な「えり好み」と、息子に見変えられる「奇妙な母親」の立場と、祖母の残酷な「戯れ」、これらすべてを、「物事を複雑にする」一切の「お^{イストワール}話」(76)から救い出し、単純明快に説明して、第三者を納得させる。だが、たとえそのような巧智が「頭の弱い」女のなかで働いていたとしても、幼い子供にそうした心配りが察せられるわけもない。母親の簡単な、そして物事を簡

単にする答えに、子供はただ「理に適わない単純さ」(76)のみを感じとっていたことであろう。そして、独り「苦悩のうちに」(66)と残り残される。

こうした母親の不可解な態度、つまり息子の「母親への愛」に対する「^{エトランジュ}奇妙な母親の無関心」を眼前にした息子の「驚」きは、『裏と表』に先行する草稿のひとつ、『勇氣』¹⁾(1933年)の一節に、より明瞭に見てとれる。そこでは、まったく同じ内容の挿話がほとんど同一の文章で述べられているのだが、ただ一箇所だけ著しく相違しているところがある。すなわち、『皮肉』では、「母親はといえば、ずっと口をつぐんだきりだった」とある。ところが、『勇氣』では、「母親はといえば、ずっと、そしてまったく奇妙なことに、口をつぐんだきりだった」²⁾となっていたのである。また、『裏と表』のための草稿断片(以下、『草稿断片』と略記)では、別の挿話が物語られているのだが、「いまひとつ、彼〔息子〕が決して理解できなかったこと」として、「息子が襲われたかなり重い病気のときの、彼の母親の奇妙な態度」³⁾が注目されている。

この「奇妙」という語は、伝記と文学表現のかかわりという観点からすると、アルペールの、より生^{なま}の経験に即した表現であると言える。決定稿の『裏と表』では、確かに、「奇妙な母親」という、「私の母とその奇妙な無関心」(71)という、端的な表現がある。しかし、いずれも具体的な情景描写から切り離されているので、「母親の無関心」に対したときの「息子」の「奇妙」な印象、「奇妙な感情〔違和感〕」(61)の生々しきは緩和されている。これは、隠蔽だろうか。そうではあるまい。具体的な情景描写においては、「奇妙」という語を行間に伏せることによって、かえって母親の「奇妙な態度」の描写が説得力を増す、という表現効果についての判断がもちろんある。が、それとともに、具体的な描写のなかで「母親」の振舞いを「奇妙」と形容することは、「母親」の異常さ、病的なところを強調し、例外者としてのイメージを固定してしまうことであり、そのような排斥的な表現は、「息子」の母親に抱く疎外感とそこに根差す敵意をあまりに露骨に表わすも

のとなり、結局テキストには、異形の母と母親拘束下に金縛りになっている敵意に充ちた息子が残るだけとなろう、という別様の判断があってもことなのである。判断、と言っては不正確である。それは、作者の意識や意図を超えて生成するテキストを織り成す、ひとつの流れである。

応えのない「母親」に向けられた「子供」の原初的な敵意は、「母親」の不可解な沈黙と言葉を前にして、焦点を見失い、その矛先は空を切る。名付けようもないものを眼前にした、このとまどいが「奇妙」という語にその表現を見出す。その疎々しい語感には敵意の影をなお潜めている。この鬱積する方途を見失った敵意を開放しつつ、不可解な事態を「理解」可能なものとし、名付けようもないと見えたものに名をあたえることができる道がある。それは、母親が「¹身体²の利³かぬ⁴ところ⁵があり、頭⁶がなかなか働⁷かなかった」と、「頭の弱い」女であると断ずることである。そうすれば、一方では母親に報復し、他方では途方に暮れる居心地の悪い状況から抜け出すことができる。「身体¹の利²かぬところ³があり、頭⁴がなかなか働⁵かなかった」という表現は、テキスト-3にもあり、また先駆草稿の『勇氣』⁴⁾や『貧民街の声』⁵⁾にも見られる。つまり、それはひとつの固定的な母親イメージに対応する表現なのである。さらに、『断片草稿』には、「耳が聞こえないで、二言三言以上には言葉を交すことができず、とりわけほんの少しでもものを考えることができない上に、文盲の、この女」⁶⁾という、「身体¹の利²かぬところ³があり、頭⁴がなかなか働⁵かなかった」という表現を敷衍する、はるかに露骨な表現が認められる。そのような固定的な母親像を一方に置き、他方で「教養があり、活動的な」息子像をそれに対置すると、この『草稿断片』の語り手が言うように、「彼らの関係が、〈こんにちは〉と〈おやすみ〉の世界を超えうると信ずるのはためられる」⁷⁾のだから、母親からの応答がないのも、「奇妙」という違和感も、当然のこととして納得されうるものになるわけである。

だが、敵意が照準を合わせられない「奇妙」な対象を了解可能なものとする、もうひとつの道がある。それは、「心のなか」にある「母親への愛」の

開放をめざすことである。そして、「ぜひともそうあらねばならない。」なぜなら、「子供」の「母親への愛」は彼を「激しく衝き上げている」からである。敵意を介しての道が対象をおとしめることによって^{ひら}拓かれるとするならば、愛を介しての道は、対象の理想化によって拓かれるはずである。

テキスト-2

「頭がなかなか働かなかった」母親の「奇妙な無関心」は、ここに既にそのひとつの理想化をみる。「頭の弱い」ことから「ほんの少しでもものを考えることができない」とされていたのが、ここでは、考えるには及ばぬことだからと、彼女の存在、すなわち「人生」と「利害関心」が外界とりわけ「彼女の子供たち」と一体化しているので、思考というような内と外の隔たりを生み出すような精神の働きは無用の長物だからだとされているのである。また、「無関心」、無感覚と見えるのは、「すべてが現に目の前にある」からだと、それも「感じられるにはあまりに自然な仕方」だと説明されている。換言すれば、母親自身が、過去も未来もなく、「現に目の前にある」という在り方、つまり「自然」的な存在の在り方をしているということである。彼女は「自然」そのものなのであり、彼女にとっては、「子供たち」もまた「自然」の一部なのだ。これは動物の母親と仔の^{なぐ}関係に類えられよう。母親の「静かに黙した」姿は、「動物的な沈黙」(テキスト-4)を^{かたど}象っているのである。

だが、このような了解は後年のことであろう。幼い「子供」にそのような、いわば思弁的な「理解」が成り立つはずもない。「何を考えているの?」という問いかけの主体は、テキストには、別段明記されていない。したがって、この問いは幾人もの人たちによって、幾度も繰り返されてきたと考えられる。ただ、この問いを何度となく重ねた挙句に、後年、「すべてが目の前にある、だから何もないのだ」という了解に達したのは、「その子供」だけであつたらう。そうだ、「子供」は「何を考えているの?」という問いを、

「心のなか」で、「苦しみのうちに」、際限もなく反芻^{はんすう}していたはずなのだ。「子供たち」とりわけ「その子供」に対して「無関心」だとしたら、一体「何を考えているの」かと。

この情景は既に『貧民街の声』のなかにもあって、「時に」以下は、ほとんど同一の文章である。しかし、導入部に大きな違いがある。「その子供の母親も静かに黙したままだった」ではなくて、「今宵もそうだった。彼は思い出していた。過ぎ去った幸福をではなく、苦しんだ奇妙な感情〔奇異の念、違和感〕のことを。——彼にはひとりの母親があった⁸⁾」となっていたのである。そして、決定稿の『肯定と否定との間』では、「今宵も」以下の導入部が「時に」以下の情景描写から切り離されて、原書で二頁半ばかりも先に置かれ、しかも「母親」が登場する他の過去の情景描写のどれともかかわりのない位置に置かれているのである。すなわち、「今宵もまさにそうだ。このモール風のカフェのなか、アラブ人街の外れで、僕は過ぎ去った幸福をではなく、奇妙な感情を思い出しているのだ」(61)とあって、それに続くのは「カフェ」の描写である。つまり、「奇妙な感情」が「ひとりの母親」にかかわるものであることも、その「感情」が「苦し」みに色濃く染め抜かれていたことも捨象されて、すべては「奇妙な」という一語に名残を留めているだけなのだ。

とすると、「文学的変形」とは、結局、隠蔽のことなのか。確かに、そのような一面があることは否めない。だが、それだけではない。「奇妙な感情」が、「母親」や「苦し」みとの間の、いわばへその緒を断たれることによって、その間に、想像力の自由が生れるのである。もしそうでなかったら、怨恨と敵意が逆巻く母親拘束という生の^{なま}体験に呪縛されたテキストが残されただけであろう。ここで起っていることは、「奇妙な感情」とそれとの直接的な結びつきを断たれた対象との間に生ずる空隙から、「心のなかには母親への愛が激しく衝き上げている」ということが可能となり、当の対象との直接的な関係によっては充たされることのできないエロスの衝動が、自由な空

間に乗じた想像力の行使によって、対象を再創造し、開放の方途を見出そうとしている過程なのである。

テキスト-3

この一節は、『貧民街の声』のなかに、ほとんど変りのない形で、しかも前後の文脈も同じ状態で見出される。そこには、「子供」の、そして語り手の「私」の感慨が「露に」述べられているところはどこにもない。つまり、『貧民街の声』の段階で、このテキストは既に完成をみていたのである。ということは、「奇妙な母親」のイメージが、「奇妙」という語を用いずに表現されているということ、多義的なあいまいさのなかで母親像が造形されているということである。

このテキストは、幾度読み返してみても、「奇妙」なあいまいさに充ちている。「彼女は夫のことを忘れてしまったが、まだ子供たちの父親のことは話をする」とはなんのことか。「夫」つまり自分の愛の対象としては「忘れてしまった」が、「子供たち」の「父親」としての限りでは「まだ」思い出すということなのか。つまり、もし「子供たち」がいなかったら、「夫」としても「父親」としてもとうに忘れ去っていたろう、ということなのか。「あまりひどくぶつと、娘が言う、《頭はぶたないで。》」とはなんのことか。母親は「子供たち」をかばっているのか。もしそうなら、なぜ、もう「ぶたないで」とは言わないのか。彼女を「長い間支配してきた」という「気性の荒い支配的な母親」(64)にまったく頭が上がらないので、中途半端なかばい立てしかできないのか。それとも、「頭がなかなか働かなかった」彼女には、その程度の知恵しかなかったということなのか。「自分の子供たちだからで、彼女は彼らを大層愛しているのだ」とは、なんと「奇妙」に屈折した表現であることか。「大層愛している」のなら、「ぶたないで」と言って当然であろう。だから、「大層愛しているからだ」とは言われぬのだ。「自分の子供たちだからで」というのは、「子供たち」が「自分の」それであることを辛う

じて「忘れてしまっ」てはいなかったこと、「夫」が「父親」としての限りで忘却を免れていたのと同様に、「子供たち」も「自分の子供たち」という役割の限りにおいて、やっと彼女の「利害関心」の対象として留まりえているのだ、ということを含意している表現なのであろう。とすると、「彼らが大層愛しているのだ」とは、ひとつのアイロニーであらうか。それとも、逆説的にも語り手は、そうした「奇妙な母親の〔示す〕無関心」にもかかわらず、「奇妙」な或る「愛」の在り方についての確信をここで披瀝しているのであろうか。「彼女は彼らを常に^エ変らぬ^ガ愛で愛しているのだ」とはなんのことか。もし「この愛は彼らにはこれまで決して^エ頭にそれとして示されたことはない」とすれば、どうして「愛している」という判断が可能なのか。「子供たち」の眼に「^エ頭にそれとして示され」続けてきたのは、「常に^エ変らぬ^ガ愛」ではなくして、「無関心な〔どうでもよい〕愛ではなかったらうか。

しかし、こうした数多くのあいまいさも、これまでの分析結果に照してみれば、よく了解できる。「頭はぶたないで」という母親としては「奇妙な」言葉。そして、「自分の子供たちだからで」という口吻によく窺われる、「奇妙な母親」を前にした「子供」の直接的な愛の交流への断念。そこから、対象に直接結びつこうとして阻碍された「母親への愛」が「心のなか」で「激しく衝き上げて」き、この「激しい」愛の衝動が「無関心な〔どうでもよい〕愛」を、「常に^エ変らぬ^ガ」そして「^エ超然とした^ガ愛」に創り変えたのである。

テキスト-4

ここに呈示されている「母親」のイメージは、これまでに見てきたものと変りない。やはり、「耳が聞こえない」、「何も考えていない」、「頑なに沈黙」を守って、「愛撫」することを知らない「母親」だ。ただ、ここでは、「動物的な沈黙」とか、「跳び上がった」という表現によく見てとられるように、その「動物的な」側面が強調されている。

ここで専ら焦点を当てられているのは、息子の「母親への愛」の可能性であり、その性質とその動きである。

「子供」は「たくさんのかんごとを感じ始めている。自分自身の存在にもやっと気づいたところなのだ。」つまり、物心ついて、母子分離の事実気づき、「自分を他人と感ずると、自分の苦しみを意識する」、そして母子一体の甘い体験を回復したいと願う年ごろなのだ。しかし、「愛撫する術も知るまい」母親を前にして、「子供」は「なかなか泣くことができない」、「甘えるらしく甘える」⁹⁾ことができない。彼は「他^{エトランジェ}人〔よそ者〕」であり、母親は「彼の言うことが分らない」のだ。彼は「苦しみ」を独り抱えたまま、「長い間、ただ彼女を見詰め続ける。」このように「自分を他人と感ずる」子供の眼差しの先には、当然「他^{エトランジェ}人」行儀な「奇妙な母親」がいる。だが、このとき「子供」は「学校」に通っているというのだが、甘えの開始は学齢期よりもはるか以前にさかのぼる。「子供」の甘え、つまり「母親への愛」の、少なくともそのひとつの表出は、ここに描かれている情景が位置する時点からはるかにかのぼったところで始められ、無数に繰り返されてきたはずなのである。そして、その都度「頑なな沈黙」にはねつけられ、「遺棄^{デゾランシオン}」のなかで、「苦しみ」、傷を負い、「救いようのない〔いやし難い/取り返しのつかない〕悲嘆^{デゾランシオン}」を、後年の「〈彼の感受性すべて〉の基になる」ような根源的な対象喪失の、抑鬱の体験をするのだ。そこで、あきらめ、「母親への愛」は撤収される。このとき「子供」の眼に映るのが「奇妙な母親」なのであり、「子供」の抱くのが「奇妙な感情〔奇異の念〕」なのである。そして、そこに宿るものは、既に述べたように、「母親への愛」ではなくて、それが応えられなかった恨みであり、敵意である。この根深い怨恨は、「彼は育てられ、感謝を要求されることだろう、まるで苦しみを免れさせてくれているかのように」という屈折した表現のうちにも明らかに見てとれよう。実際には「感謝を要求」するのが祖母であるとしたところで、語り手「私」＝「彼」の深い怨嗟の響きが、「愛撫する術も知」らずただ「頑なな沈黙」に閉じ籠

っている「母親」に相對していた「子供」の「悲嘆」に源をもっていることに變りはないのである。

「愛」のなかでの母との交感の断念と「母親への愛」の撤収があるからこそ、「奇妙な母親」という疎々しいイメージが生ずるのであり、この異形の母という原イメージとそこにまつわる原初の敵意の故にこそ、「子供」が「誰もいない〔虚ろな〕」、「宵闇が深くな」る「家」のなかに見出す、「憑かべたよう(な)〔物狂おしい〕」母親の「骨張った肩のやせ細った影法師」が鬼気せまるものとなり、「恐い」ものとなるのである。また、「母親への愛」の撤収故にこそ、それに代って、「憐れ」みがあるのだ。「母親」が「動物」ならば「愛撫する術も知」らず、「一度も彼を愛撫したことはない」のも当然のこととなる。このような蔑みを抛り所として「愛」による交感への断念が成り立ち、かつまた、そのような断念の上にただひとつ可能な「母親への愛」の形として、「憐れ」みがあるのだ。「憐れ」みとは、「愛」のなかの交感を求めない「愛」の表出なのである。だからこそ、正当にも、「それが彼女を愛するということだろうか」という「私」の問いが生ずるのである。

だが、「母親」を「憐れ」と観ずる「子供」は、それに先立って、まず自分自身を「憐れんでいる」のだ。なぜならば、母親の「愛撫」を知らない子供は、自分で自分自身を「愛撫」するほかないからである。この自己憐愍は、「母親は相も変らずこうした沈黙を守り続けてゆくことだろう。彼の方は苦しみながら成長してゆくのだ」という詠嘆の言葉によく見てとられよう。それは、その淵源である当の「母親」には「分らない」定め「苦しみ」なのである。「一人前の男になること、大事なのは、それだ」とは、こうした自己が自己を「憐れ」む心を胸底深く秘め、気強く「母親」への「憐れ」みだけを意識に上せることによって「愛」のなかの交感を断念すること、それを学ぶことの「大事」さを説こうとしているのである。だが、自己憐愍のやみ難さは、「そうではない、とぜひとつも思わねばならない」という言葉がよく示している。「そうではない」、なぜならば、「一人前の男になる

こと」とは、「子供」が「一人前の男」になろうとも依然として「心のなか」深く希求されている母との「愛」の交流の場にはなく、当然のことながら、ただ決定的に母との「愛」が不可能となるだけの、「老い」と「死」への「道に通じているだけだからだ。」

だから、「母親」が「子供」の眼に、「救いようのない悲嘆〔遺棄〕」のなかに打ち棄てられていると映るのは、自己への「憐れ」みが母親へのそれに転化したのと同様に、自らの身の上が母親の身の上に移し換えられているからなのである。幼い子が母親に対して自分を「他^{エトランジェ}人〔異邦の者〕」と感じるということは、幼い子にとって母は世界に等しいのだから、彼は世界に対して己れを「異邦の者」と感じるのだ。世界は「彼の言うことに耳を傾けない」し、「彼の言うことが分らない。」この世界の「頑^{ミユクテイスム}な沈黙」を前にして、子供は「言葉^{ミコトコト}を奪^ヒわれた世界」のなかでもがくばかりだ。それは人生の初発に子供が落ち込んだ^{かんせい}陥穽であり、「生活〔人生〕」の「絶え間^{ズイ}」なのだった。子供は、身に具^{そな}わるエロスの衝動と意志の力によって、己れを「憐れ」み母を「憐れ」んで、「苦しみ」に耐え、そこからはい上がり、やっと「たくさん^{オノノ}のことを感じ始め」、「自分自身の存在にもやっと気づいたところなのだ。」それがまた、母の「この沈黙」が「ひとつの時の絶え間を、無量^{テムズユレ}の瞬間を^マ表わして〔しるして〕いる。」つまり、そこに、「子供」が「宿題」をし「一人前の男」になり「老い」てやがて「死ぬ」という、「生活〔人生〕」の「法^{のり}を超えた^{テムズユレ}」、「人生」の常軌を逸した裂け目、魔の「瞬間」のうちにまたもはまり込んでしまうという「しるし」が見てとられているのである。

「そうしたことを漠然と感じると、激し易いたちの子供は、母親への愛がどっと溢れ出すのが感じられるように思うのだ。」文字どおりには、「子供は、彼の習^{ラビット}性^(ル・アビット)となっている〔彼にとりついている〕激しい感情^エのほとばしりのなかで、母親への愛を感じるように思うのだ」ということだ。それはまず、日ごろの「生活」では互いに「他人」同士と思い定めることによって「苦しみ」を防禦し、「法^{のり}〔節度〕」を保っていたのだが、ふと見舞った「時

の絶え間、「生活」の陥穽におちいることによって、「法」から外れ、自らに否認されていた「母親への愛」が「ほとぼしり」出たということである。この「愛」は、あまりに強く思い断たれ、深く抑圧されていたので、当の本人にとってすら、「それが彼女を愛するということだろうか」といふかられるほどであったろう。「子供」の自分自身の「感情」に対するこうしたとまどいと疎々しさは、「激しい感情のほとぼしり」のうちにあるながら「母親への愛を感じるように思うのだ」と言われているところに、よく表われている。「ぜひともそうあらねばならない。なぜなら、結局、自分の母親だからだ」という言葉は、「母親」、「子供」が日ごろはどれほど疎遠な関係にあったかをよく語っている。「時々」不意に訪れるこの例外的な「瞬間」がなかったならば、「骨張った肩のやせ細った影法師」が自分の「母親」であることさえも「忘れてしまった」ことであろう。「激しい感情のほとぼしり」のなかで初めて、「影法師」が「母親」として辛うじて「子供」の視界にすぎ留められえたということは、両者のこの隔たりの遠さをよく示している。

だがまた、原初の「遺棄」と「悲嘆」にあっても、その後「時々」見舞われる「時の絶え間」、つまり原初の「遺棄」と「悲嘆」の再来にあってもそうだったのだが、「子供」が「母親」の「頑なな沈黙」に呪縛され、かつまた己れ自身のそれに封じ込められるという「救いようのない」状況から脱しえたのは、「彼の習い性となっている激しい感情のほとぼしり〔彼に宿っている（エロスのな）飛翔〕」によってであることを、この一節はよく示しているのである。「母親への愛」は現の母親にやみ難く向かい、取り付く島もなく、虚しく空を切る。しかし、そのとき初めて、この「愛」は虚空に「飛翔」する。その「ほとぼしり」が母と子の疎々しい隔たりを押し流し、エロスのな「激しい感情のほとぼしり」のなかで、現の「母親への愛」が確かめられる。「ぜひともそうあらねばならない。」というのも、「なぜなら、結局、自分の母親だからだ」というだけではなくて、幼い子供にとって母親

は即世界であるからだ。「子供」はこの「エロスのな飛翔」によって、初めて「母親」に結び付き、世界を拓いてゆくことが可能となったのである。

母と子が互いの「言うことが分らない」、「他人〔異邦の者〕」同士の関係に止まり続けるのが現実の「生活」であるという限り、このエロスの飛翔がかいま見させる世界は、「^{デムスニレ}度を超した」、幻想の世界である。そこでは、^{うつつ}現の「母親」、「子供」の「母親への愛」、そしてふたりの絆が確かめられる「瞬間」が、「無量の〔度を超した〕」ものと観じられる。つまり、理想化の心理機制が「度を超し」て働いている世界だ。ただ、見落してならないのは、それは「子供」の身に「エロスのな飛翔」が「宿っている」からこそ可能となったのだということ、そしてまた、このエロスの飛翔がなければ、「子供」は「人生」の「絶え間」に、「言葉を奪われた世界」にはまり込んだきり、「救いようのない遺棄」のなかで母即世界に「異邦の者」として留まったまま、そこから抜け出すことはできなかつたであろうということだ。さらに、この「エロスのな飛翔」の力によってこそ、「頑なな沈黙」のうちに自らを閉ざしていた母即世界が、「愛」の対象に変容を遂げるのである。「叫び声、野卑な言葉」に對置された「この沈黙」、「生活」に對置された「無量の瞬間」という表現は、このような理想化による世界の^{きざし}変容の兆である。このエロスの飛翔による世界の幻想的変容があるからこそ、それにそぐわぬ、それを振り払うかのように「跳び上がる」「母親」の^{うつつ}現の姿「を見て、彼は痴呆のような様子をしている」のである。そして、再び「子供」は、断念とともに、「一人前の男になる」道を歩み続ける。こうした反復、母即世界との間に繰り返される疎隔と、エロスの融合への衝迫の「ほとぼしり」、そして対立するこの二つの原理の統合、それが「子供」の「人生」の課題であり、それがまた、少なくとも『裏と表』というテキストの生成過程そのものである。いずれに偏しても、精神の^{のり}「法を超えた〔中庸を失った〕瞬間」に落ち込む、つまり鬱か、あるいは「無量の」高みに舞う、つまり躁か、どちらにしても「痴呆」状態が、狂気が待っているだけである。「子供」の「エロス

的な飛翔」力の強靱きょうじんなところは、「母親への愛」を胸に独り抱きつつ、「動物」染みて「跳び上がる」現うつの「母親」の姿を見守り続けるところにある。この不屈の飛翔力は、そのエネルギーを、原初的な「遺棄」の体験以前の、「原初的小エロス状態」¹⁰⁾(傍点は原著者)の体験から汲みとっているのであろう。

「母親」はなぜ「遺棄」と「悲嘆」のなかに「子供」を放置したのか。「子供」が現に眼にしている「母親」の姿には、自らは否認している自身の過去の体験が投影されているのであり、それは彼の眼に映じている限りでの「母親」の姿でしかないのだが、しかしまた彼の眼は、「母親」の「沈黙」の本質をもよく象りえているのではあるまいか。つまり、「子供」がもっと幼いころ、「母親」自身が「救いようのない遺棄」と「取り返しのつかない悲嘆」の体験をもったのであり、そこからついに脱け出すことができなかったのではないだろうか。「宵闇」のなかのその「頑なな沈黙」、その「憑かれたよう」な「空けた眼」、その「悲嘆に染まっ」た姿、「愛撫する術も知るまい」という感情表現の抑止、そして「頭がなかなか働かなかった」という思考力の停滞、これらはすべて鬱病者の特徴でもある。「子供」はこの「母親」の「存在」全体を深く侵蝕している「悲嘆」の影を直観していたに違いない。そして、鬱病者の母親に育てられた子供は、自身が抑鬱の体験をもつとともに、幼児は母親に同一化するものだから、鬱病者の思考と行動の様式を、つまり母親のそれに似た「ひとつの感受性」を身につけ、それは「魂に取りついた鳥もちのようなもの」になる。彼もまた、「愛撫」される「術も知るまい」、「甘えるらしく甘える」ことのできない子供になり、「母親への愛」は現実の対象への回路を見出せないままに、虚空にほとぼしるのだ。

さて、今度は先駆形と異稿にあたってみよう。先駆形としては、『貧民街の声』の一節、異稿としては『肯定と否定との間』のための手稿とタイプ原稿が挙げられる¹¹⁾。

テキスト-4 と、それに対応する『貧民街の声』のなかの一節とは、大体

同じなのだが、違っているところも幾つかある。以下に、後者を基本として、前者と相違する重要な点を、また両者と手稿およびタイプ原稿との重要な相違点を示そう。傍点部分はテキスト-4と表現の異なるところ、()内は『貧民街の声』に、()内は手稿およびタイプ原稿にあって、テキスト-4にないものである。

「〔……〕この(嘆くような)^{フランチイフ}頑なな沈黙は救いようのない悲嘆に染まってくる。(それを知る者としては誰もいないのだ。

だが、子供のひとりが、彼の母親がたぶんそこに彼女のただひとつの幸せを見出している、こうした姿態に苦しみを覚えている。)子供がこのとき入ってくると、〔……〕だが今、この沈黙は、ひとつの時の絶え間を、永遠の一瞬を表わしている。〔……〕なぜなら、結局、自分の母親だからだ。

(それにしても、彼女は何を考えているのだろうか? 一体何を考えているのだろうか?)何も、だ。外は、光とざわめき。〔……〕彼の母親は相も変わらずこうした沈黙を守り続けてゆくことだろう。(そして相も変わらず、子供は問い続けてゆくだろう、母親にも彼自身にも。)彼は苦しみながら成長してゆくのだ。一人前の男になること、大事なものは、それだ。彼の祖母が死ぬだろう。次いで彼の母が、そして彼が。(そして、彼らの冷たい墓石の端には、問いも答えもないだろう。あるのは、決定的な沈黙だ。)

母親が跳び上がった。(というのも)恐かったのだ。(彼女は息子をしかりつける。)そんな彼女を見て、彼は痴呆のような様子をしている。宿題をおし、と言われる。子供は宿題を済ませた。(彼は愛し、苦しみ、あきらめた。)今日、その彼は(やはり)いとわしい、(そして暗い別の)部屋にいる。彼は、今や、一人前の男だ。それこそが、大事なことであったのではないか? そうではない、とぜひと思わねばならない。〔以下は手稿断片〕なぜって、宿題をし苦しみを耐え忍ぶこと、それは老人になる道に通じているからだ。〕¹²⁾

テキスト-4 とその先駆形および異稿とを比較対照してみると、次のようなことが指摘できよう。母親のイメージについて言えば、その「頑なな沈黙」は「嘆くような」と形容され、「それを知る者としては誰もいないのだ」と説明されていたのだが、これらは「沈黙」のよって来る背景、見棄てられている者の抱くメランコリーを端的に表現している。また、「彼女は息子をしかりつける」というところは、「沈黙」し「異邦の者」に留まり続ける「奇妙な〔異様な〕母親」というのではない、ありふれた、しかもどこか「祖母」に似た「母親」の姿を想い浮かばせる。「嘆くような」と「彼女は息子をしかりつける」の削除によって、神秘的で、「異様な」母親像が造形されたのである。

もっと大きな相違点は、「息子の母親に対する」心理の叙述にある。先駆形の、「だが、子供のひとりが、彼の母親がたぶんそこに彼女のただひとつの幸せを見出している、こうした姿態に苦しみを覚えている」は、「幸せ」から排除されていると感じている「子供」の羨望、恨み、「苦しみ」を、つまり「子供」自身のメランコリックな心理状態を端的に語っている。そして、「一人前の男になること」とは傷ついた甘えの心を思い切ることであることが、「彼は愛し、苦しみ、あきらめた」と、異稿の「苦しみ耐え忍ぶこと」という言葉によってはっきりと語り明かされている。さらに、そうした甘えの断念の行きつく先は、心密かに母子一体の「幸せ」を希求しながらの孤絶でしかないことが、「(やはり)いとわしい、(そして暗い別の)部屋にいる」によって、明示的に言い表わされている。

「何を考えているんだろう」という「子供」の執拗な「問い」は、母に「遺棄」されている子供の「嘆」きを、彼の「ただひとつの幸せ」とは彼の「母親への愛」に対する母親の「答え〔応え〕」なのであり、それを除いては人生に「大事なこと」は何ひとつないという思いを、よく語っている。そうした母と子の間の疎隔に「苦しみ」続ける「息子」にとっては、「あきらめ」というのは本当はないのだということが、異稿の「そして、彼らの冷たい墓

石の端には、問いも答えもないだろう。あるのは、^{決定的な}「取り返しをつか
かない」沈黙だに明瞭に見てとられる。ここには、「問い」に「応え」が返ってくる前に、母と子の「愛」の交流が成り立つ前に、「冷たい墓石」のなかに、別々の「取り返しをつかいない沈黙」のなかに封じ込められてしまうことへの恐怖が露に示されている。

つまり、先駆形と異稿においては、「母親」から疎隔され「遺棄」されて、母親拘束下に囚われている「息子」の「嘆」きが、はるかに主情的かつ具体的に語られており、その分だけ「母親」をつき放して見るための隔たりは生まれず、「奇妙な母親」像の造形に至る方向はまだ見出されていないと言える。

母親に遺棄されると動物の仔も抑鬱状態に陥るといふ。「動物的な沈黙」にも「苦しみ」はあるわけだ。ただ、動物の仔には、「自分自身の存在」に「気づく」ということはないから、「自分を他人と感ずると、自分の苦しみを意識する」ということもない。そのような「自分自身」を成り立たせるのは言葉だ。言葉が、母と子の隔たりを意識させ、それを深めると言える。だが、遺棄された動物の仔の「言葉を奪われた沈黙」は「決定的な沈黙」だが、人の子は言葉によって、「問い」と「答え」によって、この隔たりを取り除くことができる。少なくとも、除こうと努める。^{うつつ}現の対象に向けてのそうした努力は、なおさら「苦しみ」を深めるばかりであるかもしれない。それでも、「愛撫する術も知るまい」という「母親」と「子供」のエロスの交流という「ただひとつの幸せ」の可能性は、やはり言葉を介する道にしかない。^{うつつ}現の対象との「愛」のなかでの交感を「あきらめ」たとき、「子供」は己が身に具わるエロスの飛翔力によって、文学テキストという言語空間に母と子の想像的な関係を創り出し、「答え」を自らに与えようとするのである。文学作品を「書くこと」とは、なるほど「自らの強迫的な観念を秩序付けること」¹³だ。だが、「強迫的な観念」には、「苦しみ」だけでなく、「幸せ」も含まれている。「子供」の、「息子」の心中に、「母親への愛」が止めどな

く「溢れ」続けている限り、無意識裡に「幸せ」の幻想が育まれてゆくはずだ。「書くこと」とは、現実を否定するこのような幻想が、虚空に「ほとぼしり」出、「飛翔」するのを「秩序付けること」なのでもある。

(この項つづく)

〔注〕

- 1) Albert Camus: *Le courage*, in *Cahiers Albert Camus 2*, 1973, Gallimard, pp. 219-221.
- 2) *Ibid.*, p. 220.
- 3) Albert Camus: *Essais*, 1965, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, p. 1214.
- 4) *Le courage*, p. 219.
- 5) Albert Camus: *Les voix du quartier pauvre*, in *Cahiers Albert Camus 2*, pp. 273.
- 6)-7) *Essais*, p. 1215.
- 8) *Les voix du quartier pauvre*, p. 273.
- 9) 土居健郎『うつ病の精神力学』、〈現代のエスプリ〉No. 88 所収, p. 98.
- 10) 森山公夫『現代の精神医学解体の論理』, 1975, 岩崎学術出版社, p. 133.
- 11) *Essais*, p. 1187.
- 12) *Les voix du quartier pauvre*, pp. 274-275. *Essais*, p. 1189.
- 13) Jean Grenier: *Albert Camus*, 1968, Gallimard, p. 19.